



発掘 文学の宝



2026年最初の文学の宝は、荅北町にはゆかりの深い勝海舟とつながりのあるオランダ人カッテンディーケを紹介します。荅北町で見た光景もしっかりと記されており、歴史的にも価値ある日記を残しています。

企画 ドットワークス/下川嘉奈

ヴィレム・ホイセン・ファン・カッテンディーケ

1816年1月22日 -

1866年2月6日

江戸幕府の開いた長崎海軍伝習所に招聘されたオランダの海軍軍人、政治家



生誕210年

日本近代化の功労者 カッテンディーケ

平井 建治

嘉永6年（1853）、黒船来航で鎖国政策が崩れ、江戸幕府は海軍創設とオランダから軍艦を購入することを決めた。安政2年（1855）、長崎海軍伝習所が開かれ、海軍士官を養成するため、幕臣や雄藩藩士から選抜された生徒

たちを、オランダ軍人教師が、蘭学（蘭方医学）や航海術など諸科学を教育した。安政4年（1857）、第2次派遣されたカッテンディーケは、幕府が購入した軍艦・威臨丸をオランダから回航来日、伝習所では勝海舟や榎本武揚らを教えた。同じ伝習所には、日本で最初に医学を教えたポンペもいた。翌年6月7日、カッテンディーケは練習航海で威臨丸と鵬翔丸を率いて富岡へ寄港した。乗船者は、富岡来訪2回目の勝海舟、五代友厚ら生徒、オランダ人船員などである。

今回はカッテンディーケの日記から、富岡滞在5日間の模様を取り上げた。それには富岡は方角的、地勢的に最も安全な停泊地であるとして、167年前の富岡を次のように表わしている。「湾に沿って散歩しているうち、突然土堤の上に出たが、これは明らかに住民が水田に淡水を拵えたものである。左には約20から25フィート下に海を見下ろし、右には淡水の池を控え、その水はほとんど土堤の縁とすれすれの所まで湛えていた。こ

こは土地が肥沃で小麦・米・甘藷・藍が沢山できる。農耕に馬を使っているのは、ここで初めて見た。しかし激しい仕事をさせられているその小馬は見ただけでも憐れだ」。一目下町から百間土手に登った情景を、袋池の竹まいや農夫の農作業を手取るように描写している。ただ、右と左が間違っている。次は、二丁目大手門の状況を見事なまでに活写。「我々は突然矢来で囲まれた広場に突き当たった。そこは2日前一人の悪人がお仕置きに遭った場所だということだった。たぶん一般への見せしめに血で染められた板や砂、棒、またはその罪人を縛った綱、落ち首の転げ込んだ穴、その他のお仕置きに関係あるものが残らず、その場所に放置されてあることであろう」。大手門は軽罰だけでなく、京の坪刑場と同じ処刑も行われていた。時代の違いはあれ衝撃的なシーンである。さらに日記にこうした一文があった。「この地では荒い海で、気持ちの良い海水浴もした」。これは日本で最初に海水浴が行われた海

お勧め本

『長崎海軍伝習所の日々』
カッテンディーケ著、水田信利訳
／平凡社〈東洋文庫〉

カッテンディーケが長崎に赴任していた1857～1859年の江戸時代の様子を知ることができる貴重な日記です。

